

平成27年2月3日
関西蔵前午餐会

オペラ「蝶々夫人」の モデルは実在したのか

S39年電気卒
田村洋一

三浦環像とグラバー邸

三浦環像・蝶々夫人



グラバー邸



グラバー園内のプッチーニ像と三浦環像



グラバー邸の庭からの眺め

手前右側辺が船着き場？ 対岸に長崎造船所の立神ドック(戦艦武蔵を建造)が見える





稲佐地区(ロシア村)の紹介

ロシア人墓地



ステッセル將軍上陸地



グラバー園(南山手)から東山手を望む(現在)



1 背景： オペラ「蝶々夫人」誕生までの経緯

- ・明治24年～明治30年秋 ロングの実姉コレル夫人長崎在住
- ・明治31年1月 小説「蝶々夫人」が雑誌センチュリー誌に掲載
作者：ジョン・ルーサー・ロング アメリカ人 弁護士
- ・明治33年3月5日 劇「蝶々夫人・日本の悲劇」ニューヨークで
初日。於ヘラルド劇場 演出者：ベラスコ
- ・明治33年4月28日 上記劇がロンドンで上演され、初日プッチーニ
が観劇し、その日にオペラ化を申し入れる。
- ・明治36年 小説「蝶々夫人」の単行本が出版される
- ・明治37年2月 オペラ「蝶々夫人」スカラ座で公演。初日で打切
- ・明治37年5月 オペラ「蝶々夫人」再デビュー 最大級のヒット
となる
- ・昭和6年 コレル夫人帝国ホテルの講演で「蝶々夫人」が実話
であることを述べる

1 背景：小説の作者ロングとコレル夫人

・作者ジョン・ルーサー・ロング

フィラデルフィア在住の弁護士。趣味で小説を書く。日本文化に高い関心を示しており、明治28年に「東京のおサクラさん」という小説を発表している。日本に来たことはない。

明治36年の単行本発行のときに、「ヒロインが実話と空想の両方だ」という趣旨を記しているとのこと。

・コレル夫人：ロングの実姉でアービン・コレルと結婚

アービン・コレル：宣教師であり、鎮西学館の校長も務めた。鎮西学館は東山手にあった(現在は諫早の鎮西学院)
明治24年から明治30年秋まで、長崎東山手に住んでいた。コレル夫人の長崎の体験が小説に反映しているであろうが、帰米後2, 3ヶ月で小説が発刊されている。大筋は出来ていたのではないか。

・宣教師らは長崎式結婚(後述)に対しては批判的

2 小説「蝶々夫人」の内容について

- ・原本(英文)の入手は出来なかった。
- ・「原作(1898)蝶々夫人」(古崎博訳著S56年発行)による。
訳著者は鎮西学院の理事長であり、発行の目的を次の様に記している。「鎮西学院100周年にあたり、オペラ「蝶々夫人」と学院の関係を正しく究明すると共に、原作の全文を翻訳してそれを記録に残そうと考えた。」
- ・「原作(1898)蝶々夫人」の目次
 1. 序曲(原本の探求)
 2. 本章(原作 蝶々夫人 全訳)
 3. 終曲(後日物語)
 4. 付録(蝶々夫人のモデルについて): 古崎氏本人が調査・考察している。→大いに参考となっている。

小説「蝶々夫人」のあらすじ(1)

(一)

- ・長崎に着く前の艦上で、結婚について話し合っている。
- ・ピンカートンは、周旋屋に頼んで妻と、さらに二人が住む家を見つけた。純日本式である。借家の契約期間999年。
- ・蝶々さんの親類が出入り禁止になっていることを後から知った。
- ・結婚式に大勢の人が来た事を、ピンカートンはうるさいと思っており、それを蝶々さんは悲しく思った。
- ・8月のお盆の祭りをピンカートンは許可しない。蝶々さんの親類がお盆の行事をしないことについて抗議に来た。しかし最後は親しくなり、その日の夜に帰っていった。
- ・蝶々さんが宣教師のところへ行って話を聴き、新しい宗教に改宗しようかと、考えていることを知って、ピンカートンは驚いた。
- ・ピンカートンは、駒鳥が巣を作るときに帰ってくると言って去った。
- ・しばらく気まぐれな生活を楽しんでピンカートンが去ってから、蝶々さんは生まれた子供に「茶目(トラブル)」と名をつけた。蝶々さんは妊娠したことをピンカートンに知らせていない。

小説「蝶々夫人」のあらすじ(2)

- ・春になり、駒鳥が巣を作っても、ピンカートンは帰ってこない。
- ・在り金が減り、召使のスズキと町で三味線を弾いて稼ぐかという冗談などを話し合う。
- ・アメリカでは一度結婚したら、離婚するのは大変だと、召使に言う。(蝶々さんは正式な結婚であると信じている)
- ・ピンカートンが帰ったときに、何をするか予行演習をする。
- ・ナカウドの五郎が、ヤマドリとの再婚話を持ってくる。その気はないが、ナカウドの立場を考え、見合することは了承する。ヤマドリは引退した日本の元殿様である。
- ・ヤマドリは「それで彼女の父上は薩摩の乱の時、天皇方につかれたんですな？」と言う。
- ・見合いはきっぱりと断る。

小説「蝶々夫人」のあらすじ(3)

(二)

- ・赤ん坊を連れて、米国領事館を訪ねる。米国での離婚について訪ねる。
そのほかに、「父が短刀で自殺してから、私は貧乏になりました」と言う
- ・領事は最後に、清国との戦争がありそうなので9月1日頃所属海軍を長崎に集結させると伝える。
- ・軍艦が17日に入港する。蝶々さんと召使は、ピンカートンを迎えるために、家の掃除をし、花で飾った。しかしピンカートンは一向に帰って来なかった。
- ・一週間経ち、客船が入り、ピンカートンは金髪の女性と腕を組んでいた。
そして次の朝には軍艦は姿を消していた。
- ・米国領事館を訪ねる。領事はピンカートンから預かったお金を渡そうとするが、断る。その時ピンカートン夫人が入って来て、神戸にいる夫に電報を打ってくれと頼む。「赤ん坊と子守に会ってきた。引き取って、子供を連れて行きたい。蝶々さんには明日話をする」という内容。
- ・家に戻った蝶々さんは、父親の唯一の遺品である短刀で、自殺をはかった。
召使が蝶々さんの傷をくるんだ。
- ・ピンカートン夫人が翌日ヒガシヒル(東山手)の小さな家を訪れたときは、
そこにはもう誰もいなかった。

3 検証(1):時代はいつか(古崎博原作蝶々夫人を参考)

- ・米領事の言:「アメリカ政府が清国との戦争の可能性を検討するために、9月1日頃所在海軍を終結するので、ピンカートンの船には長崎寄港が命じられている。」
- ・小説内の記述:「9月17日彼の軍艦が入ってきた。」
- ・「一週間たって客船が入ってきて、ピンカートンが金髪の女と腕を組んでいた。次の朝軍艦は港から姿を消した」とある。
- ・「蝶々さんが自殺したのは、9月26日か27日であろう。」
- ・明治27年9月17日、日本連合艦隊と清国北洋艦隊が、鴨緑江河口沖の黄海上で海戦を行い、清国艦隊を撃破した。このことより、蝶々さんの自殺は明治27年とするのが妥当のように思われる。
- ・この時、蝶々さんは17歳と書かれている。

3 検証(2):住んでいた家の場所は

- ・小説中に「Higashi Hill」と明記されている。「東の丘」、東山手と考えるべきであろう。東山手の居留地外？
- ・住居のスタイル:「アメリカ式の金具を使って出入り口に鍵がかかるようにした。その他は純日本式である」と記されている。
- ・居留地内の家を日本人の周旋屋が斡旋することは難しかったであろうこと、居留地内に和風住宅が建っていたとは思えない。
→東山手の居留地外と考えるべきである。ピエール・ロチが住んでいた十人町は有力な候補。
- ・上記仮定にたつと、ピンカートンが駆け上がった坂は、「オランダ坂」であろうし、蝶々さんの親戚が上った坂は十人町の坂であろう。

3 検証(3): 蝶々さんの出自は(1)

- ・小説: ヤマドリとの見合いに時、ヤマドリがナカウドに次に様に話す。「それで彼女の父上は薩摩の乱の時、天皇方につかれましたのですな？」(小説ではこれのみ)
- ・オペラの台詞: 蝶々さんの持ち物に短刀があり、ゴローは次の台詞を言う。「彼女の父親が帝から賜った物です・・命令で・・(切腹のしぐさをする)」ゴロー「父親は、従いました」
- ・「蝶々さんは長崎のオマラ(Omara)の令嬢です」という台詞も有。Omaraを大村と解釈する説がある。三浦環は蝶々さんの父親は大村出身の士族であると言い切っている。しかし、元大村藩士で官軍として参加した者が、帝から短刀をもらい、切腹したというのは、なんともおかしな設定である。

3 検証(3): 蝶々さんの出自は(2)

- ・小説内で蝶々さんが「私は8月のお盆の祭りをしたいんですが」とピンカートンに打診するが、断られる。
- ・蝶々さんの親戚が抗議に来るが、ピンカートンに丸め込まれ、その夜に打ち解けて、帰って行ったという話がある。
- ・長崎は天領であり、定着した士族はいなかったはず。その日のうちに帰り得たとするならば、徒歩でも船でも往来できる深堀藩(佐賀藩の支藩)の士族であろうと古崎氏は推測する。
- ・深堀藩士で佐賀の乱(明治7年)で死んだ伊東鼎之助の墓が諫早に実在する。佐賀に同調して、長崎県庁を襲撃することを企てたが、諫早の寝返りで、伊東は諫早で殺された。殺害した者の子息が鎮西学館の生徒にいたそうである。古崎氏は可能性を示唆している。そうすると蝶々さんの自害は20歳程度の時となり、原作の17歳と辻褃が合わない。

3 検証(4):どのようにして知り合ったのか

- ・長崎に向かう船上で、ピンカートンと友人セイヤーと「長崎(日本)式結婚」の話をしている。
- ・長崎到着後すぐに、次の様に書かれている。「ピンカートンは結婚しただけでなく、住む家を彼一流の方法で、自分の楽しみのために手に入れてしまった。周旋屋に頼んで妻と、更に二人が住む家も見つけた。この借家の契約期間は999年である。」
- ・オペラでも冒頭、周旋屋がピンカートンを借家へ案内する場面から始まる。
- ・長崎(日本)式結婚は、仏人ピエール・ロチ著の「お菊さん」に書かれている。明治18年に長崎に滞在した経験をもとに書かれた小説である。ロングはこの小説に影響されたのであろう。

長崎(日本)式結婚の起源

- ・日露修好通商条約(1958、安政5)締結後、ウラジオストクを母港とするロシア極東艦隊が、長崎で越冬するようになった。
- ・水兵のために「ロシアマタロス休息所」と呼ばれる、遊郭を稲佐地区に作った。検懲についてのエピソードあり。
- ・将校たちのレクリエーション設備も当然作られたが、一冬を一軒の家で、若い女性と過ごすことが出来るシステムが発生した。家と女性を斡旋する周旋屋が相当いたようである。場所は稲佐地区で、居留地外である。そのために役所に届け出る必要があった。現在でもその書類は残っているそうである。
- ・このことは、ロシアの海軍関係の者から、ヨーロッパには伝わっていた。このことから、ピーエル・ロチは明治18年に長崎に滞在し、その経験を「お菊さん」として出版した。

「お菊さん」(ピエール・ロチ)概要(1)

- ・日本に向かう軍艦(仏)上で、ロティとイヴが話し合っている。
「僕はね、着いたらすぐと結婚するんだよ」
- ・長崎港に着いた時のロティの表現
錨を入れると、すぐに小舟で物を売りに来た。この人間たちのいかにも醜く、卑しく、怪異なことだろう！
湾内のどの方面にも、山々の上から下へかけて、私たちの周りに目を眩ます円形劇場となって展開した大都市のような印象を与えながら、数万の灯が闇の中に燃え輝いていた。
- ・百花園へ行き、周旋屋の勘五郎に会う。結婚相手についてフランス語で交渉する。十善寺の郊外に住むチャスマンと交渉することで話し合いがつく。

「お菊さん」(ピエール・ロチ)概要(2)

- ・結婚式の日、チャスマンが若すぎると断る。末席のお菊さんとならOKということで、交渉成立する。
- ・途中の描写は退屈なので、省略
- ・出航のとき：前日ロティはお菊さんに銀貨を渡している。当日別れを言いに来る。ロティは内緒でお菊さんの動作を観察している。お菊さんは、鉄槌を用意して耳元で鳴らして見たりして銀貨を調べている。ロティは別れでお菊さんを少しは悲しませるのかと思っていたが、心配なかった。
- ・「お菊さん」は評判となった。ゴッホは何度もこの本を読み浮世絵など日本独特の画風に関心を持つようになったと言われる。ニコライ皇太子も愛読し、明治24年来日した時、刺青師を探し出して両腕に竜の刺青をさせたという。

ピール・ロティが一夏過ごした十人町の家

(十人町: 東山手の居留地のすぐ北隣、当時は十善町と称した)

寓居跡の復元図



現在の状況



4-1 コレル夫人の講演とその後の動き

- ・コレル夫人は帝国ホテルでの講演(昭和6年、1931)で、蝶々夫人が実話であったことを言及した。
- ・数多くの研究者が蝶々さんを探し始めた。コーネル大学のグロス氏は、米国海軍の記録を徹底的に調査し、極東担当でコレル夫人が長崎滞在中にも数回長崎を訪れたセイヤ海軍医を、またピンカートンと名前が似ていて長崎を訪れた時期やその他細かいことがかなり一致している、ウィリアム・B・フランクリン少尉の名をあげている。
- ・姉から聞いたセイヤなどの実在した人物を参考にして、セイヤやピンカートンの人物像を組み立てた可能性は高い。
- ・講演はコレル夫人が長崎を去ってから33年後、83歳の時。記憶が薄れているのでは？
(バークガフニ「蝶々夫人を探して」より)

4-2 三浦環の発言

- ・明治17年生。東京の音楽学校を卒業。大正3年ヨーロッパへ留学。ロンドンのビーチャム・オペラ劇団に所属し、名声をあげた。
- ・プッチーニは「蝶々さんの役にふさわしい理想的なソプラノ歌手である」と絶賛した。
- ・昭和10年12月付「時事新報」での三浦環の記事
「私はルーサー・ロングをフィラデルフィアに訪ねて、会食し、実際のお蝶さんは死んだのではなく、子供を育てたこと等を伺いました」
- ・上記発言は蝶々夫人が実在したことを証明するものとして多くの研究者が引用している。

4-3 長崎市の対応(1)

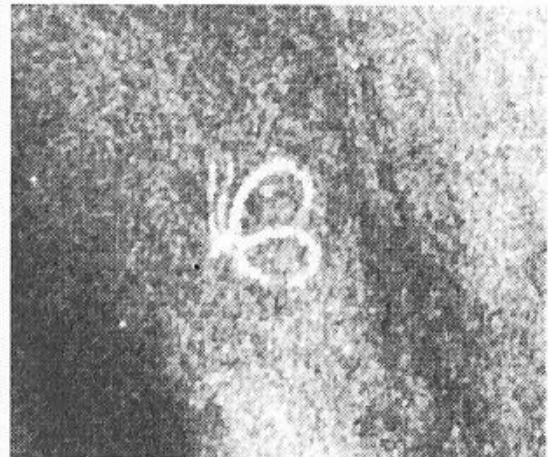
- ・グラバー邸: 文久3年(1863)に建築。明治3年グラバー商会倒産後色々な人が住んだが、明治42年から倉場富三郎が住む。
- ・三菱長崎造船所が建造する戦艦武蔵がはっきり見えるということ、昭和14年に三菱が購入する。
- ・昭和20年8月26日、倉場富三郎は首を吊って自殺。
- ・戦後三菱から長崎に所有が移っている。
- ・戦後進駐軍が接收し、ゴールズビー大佐は、グラバー邸の前で写した写真に[Mme Butterfly House 1947]と記入。当時の長崎駐留軍の軍人達は「蝶々夫人の家」と呼んでいた。
- ・美しい景観に魅せられて、オペラの舞台としてふさわしいと思ってつけたのではないか。

4-3 長崎市の対応(2)

- ・昭和23年。長崎博物館勤務の寺内氏は、初めに蝶々夫人の記念碑建設計画が有り、設置場所としてグラバー邸が後から浮上したことを明かした。「お蝶夫人の宅跡発見」という新聞記事がでたが、発見の根拠は示していなかった。
- ・長崎市がグラバー邸を「蝶々夫人の家」として宣伝することの是非について、昭和24年長崎の郷土史家古賀十二郎が中心になって会議を開いたが、結論は得られなかった。
是派:コレル夫人が昭和6年に話した内容、ツルがアゲハチョウの紋章を着物や墓に使用していたことから、グラバー邸が蝶々夫人の家として宣伝することは正当であると主張。



袖のモンシロチョウの
紋が印象的なツル



4-3 長崎市の対応(3)

非派：蝶の紋はザラにあり、芸者などは好んで使っていた。ツルがその紋を使っていたという理由だけでお蝶夫人とは言えないと異議を唱えた。

- ・長崎市は「蝶々夫人の家」の代わりに、「蝶々夫人ゆかりの地」と曖昧な表現に変更し、今日に至っている。
- ・新聞など、様々な広報が効を奏して、グラバー邸を一目見ようと観光客が南山手集まり、観光面では効果をあげた。グラバー邸を始めとする名所の売り込みを行い、昭和25年「日本観光地百選」都市の部で一位入賞になり、宣伝が報われる結果となった。

(バークガフニ「蝶々夫人を探して」より)

5 もうひとりの蝶々夫人(1)

- ・グラバーの妻ツルの子孫野田和子と楠戸義昭が「もうひとりの蝶々夫人」の中で「グラバー夫人ツルが蝶々夫人のモデルである」と主張している。その意味は何か。
- ・グラバー夫人ツルと野田和子との関係。
- ・野田和子の主張：物語のヒロインとツルの類似点を洗い出すこと。その結果は(1)互いにキリスト教徒で合同礼拝に参加し、グラバーは教会を経済的に支援していた。互いに親しい間柄であった。(2)コレル夫人が帰米してから小説発行まで三か月あった。(3)コレル夫人の記録には「ヒロインは私たちの住む宣教館の反対側の丘に住んでいた「お蝶さん」と呼ばれる女性で、彼女のことは秘密」とある。それは南山手に住んでいたグラバー夫人ツルのことである。→ツルがモデルであると主張

5 もうひとりの蝶々夫人(2)

楠戸義昭執筆部分から抜粋

- ・明治36年(雑誌発表から5年後)に単行本第二版が発売。その序文でロングは次のように記しているとのこと。「彼女は空想上の人物であるのか、あるいは実在しているのか、両方だ」といい、「ピンカートンはどこにいるのか。彼は、結局、アメリカ合衆国・海軍には存在しないのである」と書く。
- ・小説「蝶々夫人」はツルを日本女性のモデルとして、サラ・コレルの長崎在住から得た事柄に、ロングが空想の翼を広げて生まれた物語なのである。

(著者ロングがヒロインの人間像を形成するのにグラバー夫人が参考になっただけではないのか。ツルを悲劇のヒロインにすることには無理がある。)

6 まとめ

- ・ロング原作の小説「蝶々夫人」の内容を検証したが、「蝶々夫人」と歴史的事実と関連付けること出来なかった。
- ・「蝶々夫人は実話ではない」:これは事実であろう。しかし来日したことのない著者が小説化するためには、長崎滞在経験のある実姉の影響はあったことも事実であろう。日本女性のモデルとしてグラバーの妻ツルが影響したことは考えられる。
- ・長崎市がグラバー園を「蝶々夫人ゆかりの場所」として観光PRしたのは成功した。昭和25年の「日本観光地百選」都市の部で一位入賞として報われる。
- ・オペラ蝶々夫人のヒットは、ジャポニスムに加え、日露戦争最中であり、影響を与えたかもしれない。
- ・オペラ再演でヒットした理由は、定かでないが、イタリア人のアメリカ人に対する感情があったのであろうとする説あり。

7-1 蝶々さん(市川森一)(1)

- ・父親は深堀藩伊東鼎之助。佐賀の乱では、本藩に同調して長崎県庁襲撃を企てるが、諫早藩の寝返りで諫早にて死亡
- ・許嫁との仮祝言後、嫁に船で長崎へ送られる時に妊娠する。両祖母と母親に育てられる。
- ・小学生のとき、隠れキリシタンの娘の谷川ユリと親友になる。
- ・小学生のとき、母親から女が自立するためには勉強するようになると言われ、活水女学校への入学希望を持つ。
- ・父方の祖母と実母はコレラにかかって死ぬ。家計が苦しくなり、寄合町の水月楼の養女となる。しかし契約書は身売り。女中として下働きに。
- ・谷川ユリは宣教師夫妻の養女になり、アメリカに渡る。蝶々さんはいつかアメリカに行き、ユリに会うことを人生の目的とする。

7-1 蝶々さん(市川森一)(2)

- ・渡辺元(深堀商会、士族の授産事業)の世話で、置屋「末石」の芸妓見習いに。サダ(愛八)と一緒にという設定。
- ・活水からは入学を断られる。
- ・M25.7.1ゲディスバーグ号入港。独立記念パーティーでフランクリンと会い、七夕の日のデートを約束する。
- ・フランクリンと結婚(但し長崎式結婚)し、夏の間長崎の名所めぐりに明け暮れる。妊娠する。熱気球の話もあり。
- ・巡洋艦の修理が終わり、「必ず帰ってくる」と言って、去る。
- ・M27.7に巡洋艦が長崎に入港。4日後に出港。翌日客船が停泊。フランクリン夫人と米領事がお蝶さんを訪ね、親権放棄の書類にサインする。
- ・懐剣で自害する。伊東蝶、21歳の生涯だった。
- ・TVでは、S11歌舞伎座での蝶々夫人公演で息子と伊作が会う

7-2 ジュニア・バタフライ

- ・オペラ「Jr. バタフライ」 作曲：三枝成彰 台本：島田雅彦
演出：ダニレレ・アバド(イタリア人)
- ・初演：2004年4月 東京文化会館 Jr. バタフライ：佐藤成宏
ナオミ：佐藤しのぶ 露骨な原爆シーンは見たこともない程。
20分の休憩を2度挟んで約3時間半。
- ・蝶々夫人の息子Jr. バタフライが、日本の女性ナオミと恋に落ち、二つの祖国の狭間で揺れながら真実の愛を貫こうとする。
ナオミは長崎で原爆に被爆する。
- ・2006年8月3日、9日に第52回プッチーニ音楽祭で上演される。
プッチーニの故郷であるトスカーナ州のトッレ・デル・ラーゴ
野外大劇場にて毎年開催される音楽祭に上演された。
指揮：大友直人 管弦楽：プッチーニフェスティバル・オーケストラ
合唱：六本木男声合唱団倶楽部

7-3 マダム・バタフライ関連行事

マダム・バタフライ国際コンクールin長崎

- ・趣旨:オペラ「蝶々夫人」の舞台長崎で、次代を担う新人を発掘し、国際観光都市「長崎」を創造する。
- ・プッチーニのオペラ初演(1904年)100周年を記念して開催
第一回:2004年 第二回:2006年 第三回:2008年
第四回:2011年 参加者:49人 入選者:8名(内韓国人:
4名、中国人:3名、日本人:1名)

長崎「マダム・バタフライ」フェスティバル

- ・2007年、2008年、2009年、2010年、2011年と開催
- ・2011年:10月1,2,8,9,10,15,16の土、日、祝日の7日間開催
場所:グラバー園 13:30~15:30 観覧無料(グラバー園
入園料は必要)

主な参考資料

- ・ジョン・ルーサー・ロング、古崎博訳「原作(1898)蝶々夫人」
学校法人鎮西学院 1981.10.23発行
- ・プッチーニ「蝶々夫人」アレーナ・ディ・ヴェローナ
小学館DVD Book 2007.7.17
- ・ブライアン・バークガフニ「蝶々夫人を探して」-歴史に見る心の
国際交流 クリエイツかもがわ 2000.4.30発行
- ・楠戸義昭、野田和子「もうひとりの蝶々夫人」長崎グラバー邸の
女主人ツル 毎日新聞社1997.7.25発行
- ・ピエール・ロチ、野上豊一郎訳「お菊さん」 岩波文庫
初版は昭和4年
- ・市川森一「蝶々さん」上、下 講談社 2008.10.1発行